

はじめに

私たち、「がんの社会学」に関する研究グループは、“がん生存者研究”を主導し、がん体験者の視点に立ったがん医療の実現を目指してきた。そして、その一環として、2003年、がん体験者の悩みや負担に関する実態調査を行った。調査結果の概要は、「がんと向き合った7,885人の声」として報告書にまとめ、これまで多くの医療関係者、研究者、がん体験者やその家族、行政機関の人々、地域住民とさまざまな立場の人々に読まれてきた。また、がん体験者が自由に記述した悩みや負担は2万6千件の短文に整理後、静岡分類を用いて体系化して「がん体験者の悩みデータベース」を構築しインターネットで公開した（Web版がんよろず相談Q&Aサイト <http://cancerqa.scchr.jp>）。さらに、この「がん体験者の悩みデータベース」に基づき、さまざまな情報支援ツールを作成、提供を行っている。

そして、前回調査から約10年が経過した2013年、ほぼ同一内容のアンケート調査による第二次調査を企画し、全国の拠点病院等の医療機関、患者団体、静岡県等の協力を得て、4,054名のがん体験者から回答を得ることができた。

本報告書は、第二次調査結果の中から、調査に参加された1,275人の乳がん体験者（乳がんサバイバー）の調査結果をまとめたものである。

これらの研究成果は、がん患者や体験者の悩みや負担の軽減にどのように役立てられるだろうか？

第一に、患者が、これまでがんに向き合った人々が体験した悩みや負担の全貌を知ることによって孤独感を癒やし、新たな“道しるべ”として役立てることが期待される。

第二に、患者と向き合う医療技術者や行政担当者が、がん患者の悩みや負担をより深く理解し、一緒に解決策を考えるためのツールとして利用できる。

第三に、調査結果は、がんとは無縁とと思っている社会の人々が、がん患者の悩みや負担を身近な問題として理解するのに役立つ。

近年、がん医療においては“個の医療”が重視され、患者一人ひとりの症状や副作用や後遺症を軽減させることによって、QOL(Quality of Life)向上の努力が続けられてきた。本研究の成果は、患者の悩みや負担を分析し、その軽減を図ることによって、一人ひとりのがん患者の「心のQOL」の改善に役立つことが期待される。

「がんの社会学」研究グループ
研究代表者 山口 建
(静岡県立静岡がんセンター総長)